No.25

古高取通信

平成29年 4月

私たちは、活動の四本柱を基に、まちづくりに貢献することを目指します。

1．活動の拠点を創る
2．古高取の知識を深める
3．古高取の魅力を伝える
4．次世代へつなげる

古高取を伝える会会報

目　次

古高取の魅力を伝える　・・2
古高取紹介　・・・・・・・3
活動の記録　・・・・・・・4
なんでも掲示板　・・・・・・6

「宝の遺失物」

聞いた話である。遺失物と言われるものがある。電車バス又お店等。家を出てからの忘れ物である。その中で傘は忘れ物、財布は落とし物だそうだ。東京の山手線ではお骨の忘れ物、落とし物？も多いそうだ。この遺失物が駅や警察に届けられると、拾得物になるそうだ。

古高取のことであるが、発掘の結果、大量の拾得物を預かっているそうだ。これを何とかまとめ、わかり易く展示できないだろうか。

過去が忘れ物として闇の向こうに消えてはならない。「過」をあやまちとも読むが、そうあってはならない。

未来の遺産として次世代につなげればと思う。

鷹取宗惠

古高取の魅力を伝える

ふるさとのたから

直方市長　壬生　隆明

私にとって、ふるさとの宝は、この街です。「のおがた」と名付けられたこの街が、私のタカラです。数年前、私は、直方駅のプラットホームにたたずみながら、遠く福智山を見ていました。そして、私は、この街に帰ろうと決心しました。その時、持っていた小さなノートに、次のように記しました。「この街に私は帰る。この街に母います限り。」・・・どんなに遠く離れていても、この街に母がいる限り、私は、この街に帰ろうと決心しました。私の父は、東の山の麓で生まれ、母は、西の山の麓で生まれました。そして、私は、父と母の故郷であるこの街で生まれ、この街に育てられました。だからこの街は、私にとってかけがえのない宝なのです。

私は、小さいころから、日の出橋を歩いて渡るとき、とても不思議な感覚を覚えました。橋の真下で、彦山川と遠賀川が合流し、大きな川となって流れていったからです。私は、この光景を見るたびに、この街には、大自然の大きな偶然が潜んでいると思いました。また、福智山の頂上に大きな岩がいくつもあることも不思議でした。造山の仕組みなど知らない時代のことでしたから、誰かが岩を運んだのだろうと想像していました。こんな私ですから、小さいころは、福智山に雲がかかっているのを見ると、福智山に上って雲に乗れば、雲とともにどこか遠くに飛んでいくことができると信じていました。ふりかえると、まるで夢の中で生きていたように思います。

ところが、ずいぶん年齢を重ねてきたある時、藤原定家（一一六二～一二四一）の評伝を読んでいると、彼もまた私と同じように、途方もない夢を見ていたことを知りました。二十九歳の彼は、月を見つめながら、一つの歌を詠みました。それは「はじめなき　月のゆくへに　身をかへて　さらば心の果てを知らばや」という歌でした。彼は、月に乗ってこころの果てを旅してみたかったのです。

さて、四百年前、この街の東の麓で営々と茶の器が焼かれていた時代の風景はどのようなものだったのでしょうか。ここにも、この街のタカラが潜んでいます。

中野等先生を迎えて

古高取を伝える会　副島　邦弘

本年度の古高取基礎研修講座のまとめとして、特別講義をお願いした。

十二月十一日（日）十三時三十分～十五時三十分まで、直方市中央公民館二階の会議室で、お馴染の九州大学大学院教授の中野等先生による『朝鮮陶工の歴史をめぐって―秀吉の大陸侵攻と披擄人刷還―』という演題でお話をしていただいた。これは先年講義を受けた『文禄・慶長の役（豊臣政権の大陸侵攻）』に継続するもので、これに朝鮮陶工を結び付けることをお願いした。

中野先生の講義では、秀吉は朝鮮国王に対して「征明嚮導」（明征服に先導）を命ずる国書を与えたが、肥前名護屋に築城し、各大名にも陣地を配置した。そして天正二十年（一九五二）四月に朝鮮侵攻がはじまった。十二月八日に改元され文禄元年となる。秀吉は同年四月二十六日に法度を定め、各大名にあたえている。また同日に禁制　高麗国　として、

一、軍勢甲乙人等、濫妨狼藉事（兵士は無法にあばれ、らんぼうを働くな）一、放火事　付人取事（放火するな、人をさらうな）一、對地下人并百姓臨時之課役、其外非分之儀申懸事（住民・百姓に対して、税金や労務等を不法に行わないこと）

右条々、堅被停止之記、若違犯之輩於在之者、忽可被処厳科者也（右の条々を守らないものは、厳罰に処する）

天正二十年四月二十六日

秀吉朱印

という高札が立てられた。

これによって、隠れていた住民が帰ってきて安心して生活できる。村長に税の実態を聞き出し、人質をとって税をおさめさせ、住民たちは普段の通り生活させることとなった。

大名達は、この禁制を守って朝鮮駐留し倭城を築き、食糧兵站基地化していった。しかし冬仕度の不備や栄養失調等で多くの死者を出した。

その中で加藤清正は秀吉宛に近況知らせとして、鷹・鶴・縫官、そして秀頼へ侍女二人・政所の小姓一人を送った。これら人質は上流階級者や王の一族であった。ただし例外扱いである。

戦いの勝敗は国王を捕えない限り、勝ったということではなく、国王は朝鮮半島を逃げまわり、国境の義州にとどまり、命令を発していた。

慶長の役は、秀吉の目的が相違した。占領した場所の領土化と、南四道の割譲を狙っていた。多くの住民を人質として日本へ、大名の領国に送った。この時の戦いは春～秋期間にやり、冬場は倭城に籠っている。拉致したのは、医者・学者・陶工等技術者・農民で日本に連行した。これには村を一まとめとして強制的に連れて行った。

朝鮮兵の首のかわりに鼻切りなどの残虐行為を行なった。この数で論功行賞の材料とし、大名達は証明した。連行された人々は、大名の領地でそれぞれコミュニティーをつくり生活した。

秀吉が死去したことにより、大名達は朝鮮から引き揚げるとき、日本に味方した親日派を含めて引き揚げてきた。陶工達も村落共同体をつくっていたと考えられ、技術者としての位置付で大名達に優遇されていくことになる。

高取焼の陶工の八山一族は、慶長年間に黒田氏に拉致されたと考えられる。黒田長政と黒田如水が駐留したのは、長政は釜山広域市機張城で、染山市染山城には如水が詰めていた。

中野先生のまとめは次の様である。

文禄の役と慶長の役とは戦いの目的が相違する。前者は明国まで「征明嚮導」を求め、侵入する大名達に禁制の条々を定め、占領地の民衆には被害が少なかった。後者では秀吉の領土化であり、住民は強制連行され一部は人身売買が行われた。島原の口の津で奴隷市場に連れて行かれ、多くの朝鮮人達が海外に売られていった。このことはキリスト教の宣教師達が残した報告書等で理解できる。

先学の研究では日本に連行された朝鮮人は二万人を超えていた。秀吉の死後、関ヶ原の戦い以後徳川家康が幕府を開き、隣国の朝鮮との国交回復の条件には、王と王妃の墓を暴いた犯人を捕えて渡すことと、日本に拉致された人達を送還させることを求めた。その結果千五百人程度帰国した。一番住んでいた所が博多で約三分の一を占めていた。

最後に高取焼の陶工であった八山一党が拉致されたのは、如水と長政が慶長の役の時に染山城と機張城に駐留していたことから染山地区で、ここには李朝の陶器所が二ヶ所あることから考えてもいいのではないかと結ばれた。

古高取紹介

茶入雑考（四）

古高取を伝える会　副島　邦弘

今回は、三大肩衝の最後になる新田肩衝を述べる。

新田肩衝とは、大名物で漢作唐

物である。名前の由来は最初の所有者と思われる新田義貞の名前からと言われている。定かでは無い。

その伝来は、村田珠光―三好入道宗三政治（信長に献上）―信長―明智秀満（光秀の婿）―大友宗麟―天正十三年（一五八五）秀吉は所望して、「似茄子（にたりなす）」と「新田肩衝」を一万貫で入手した。―大坂落城後、藤重藤元・藤巌父子が家康の命で焼跡より拾い上げ、修復して今日の姿をなした。

その後、水戸徳川家初代頼房が拝領して同家に伝来している。現在、徳川ミュージアムに所蔵されている。

器高八・五ｃｍ、胴径七・七ｃｍ、胴回二十四・五ｃｍ、口径四・五ｃｍ、甑高一・五ｃｍ、肩幅一・〇ｃｍ、重量百二十ｇ。

新田肩衝（徳川ミュージアム所蔵）

初花肩衝よりは、やや胴の膨らみが大きく、撫肩である。また畳付もこの種はたいてい板起しであるが、これは本糸切で中央渦をなし、凹面になっている。釉景は漆の修復のために原状をしのびがたいが、所々に元の景色を残している。

主な使用茶会を述べると、

①秀吉　天正十三年（一五八五）十月七日　秀吉が正親町天皇の御前で点茶した後に、利休が相伴者の殿上人・大名に「初花」とともに用いた。

②秀吉　天正十五年（一五八七）一月三日　大坂城大茶湯。点前：宗易・住吉屋宗無・津田宗及　客：諸大名

③秀吉　天正十五年（一五八七）二月二十五日　大坂城山里丸。客：山岡対馬守景佐・神屋宗湛

④秀吉　天正十五年十月朔日　北野大茶会。

⑤秀吉　天正十五年十月十四日　聚楽第。客：津田宗及・神屋宗湛

⑥秀吉　文禄二年（一五九三）六月十日朝（文禄・慶長の役の時）肥前名護屋城山里丸。点前：共阿弥　客：明国の謝用梓・朝鮮の徐一貫

⑦秀吉　文禄五年（一五九六）十一月二十七日　肥前名護屋城山里丸。客：松浦道可・池田備中守・神屋宗湛・堀監物

⑧三代家光　寛永十二年（一六三五）八月十八日　二之丸山里。客：水戸初代頼房・相伴：細川越中守忠利・毛利甲斐守秀元・立花飛騨守宗茂

『利休百会記』の中に、「肩衝天下一」として新田肩衝が出てくる。

四回に亘って、天下三肩衝の茶入等入れて述べたが、ここで閉じることにする。

参考文献

『角川日本陶磁大辞典』角川書店　二〇〇二年
『原色茶道大辞典』淡交社　二〇〇六年

活動の記録

●子供焼物教室

〈平成二十九年一月～三月〉
場所：直方市内の小学校

本年度の子供焼物教室は、三月八日（水）の下境小学校での茶道教室を以て終了した。

私が担当したのは、南、西、下境小学校の三校だが、何れの学校でも児童たちが薄茶点前を見学した後、干菓子を頂き自らが造った茶碗でお茶を頂く様にしている。

その後、「茶の湯」についての講義と児童からの質問に答え茶道教室を終了する形を採っている。

対象が卒業を間近に控えた六年生なので目標達成の為には継続的な努力が必要だと云う意味で毎回「破（は）草鞋（ぞうあい）」の軸を掛けている。

しかし、ここ五十年で日本人の生活様式は全く様変わりした。床の間のない家も、着物を着たことのない子供も多いいだろう。

その中で「茶の湯」に込められた日本の伝統文化をどうやって伝えるか難しい状況だ。

「茶の湯」有っての「高取焼」であって、「高取焼」有っての「茶の

湯」ではない。

此の事をふまえたうえで「古高取を伝える会」が目標とする茶道教室とはどの様なものなのか皆で話し合ってはどうだろうか。

日隈精二

●学習部会（現地視察）

「唐津窯元めぐり」バスハイク

〈平成二十九年三月二十八日（火）〉

時間：九時～十七時

コース：直方中央公民館～唐津城～旧高取邸～曳山展示場～中里太郎右衛門窯～御茶盌窯跡～直方中央公民館

今年度の学習部会は、現地視察を以て全て終了致しました。

ご苦労様でした。

以下、現地視察について報告致します。

～・～・～・～・～・～・～・～

伝統を受け継ぐ唐津を旅して

三月二十八日、とても暖かい一日でした。

まずは、唐津城へ。

天守閣は改修工事中のため入館できなかったのが残念だけど、唐津湾に浮かぶ島々と虹の松原の曲線の美しさ。その眺望は絶景なり。

次に、楽しんだのは、旧高取邸。

杵島炭鉱などの炭鉱主として知られる高島伊好氏の邸宅であったという。

能舞台、杉戸絵、欄間、襖絵などの意匠は圧巻。特に中国の故事や花鳥風月に題材をとった杉戸絵は、初めて目にしたことでもあり、忘れることができない。

伝衛門邸は、白蓮のためにつくられたものであるが、この高取邸は訪れる人を魅了するためにつくられている。我々筑豊人はつい地元の白蓮御殿と比較したくなるが・・・・・・

興奮気味の気持ちをおさえつつ、曳山展示場へ。ここも唐津くんちの町民文化がしっかりと曳きつがれていた。

くんちの様子は、ビデオで分かりやすく説明がなされ、迫力ある唐津くんちの世界を楽しむことができた。

最後は、本日のメインである、中里太郎衛門陶房。

江戸時代、唐津藩の御用窯として将軍家、高家への献上品を作陶。約三百年前の登り窯、唐人町御茶盌窯が大切に保存されていた。この登り窯は大正時代まで使われていたとの事。歴史の重みがずっしりと伝わってきたように思われた。

一年前から、この陶房にいるという、イケメンのイギリス青年（お弟子さん？）とおしゃべりもでき、若返ったような気分だった。

伝統を守る事は、人々を幸せにすることを痛感した一日だった。

柴田ムツ子

●鞍手高校茶華道部焼物教室

（地域対象の焼物教室）

〈平成二十九年四月十八日（火）〉

場所：鞍手高等学校茶華道部

百周年を迎えた福岡県立鞍手高等学校の茶華道部は、今年度の文化祭（鞍高祭）の特別企画「郷土の文化財　高取焼に親しむ」の一貫として陶芸体験を行いました。

出来上がった作品は、文化祭の当日に展示または使用します。その他、「高取焼」パネル展示や陶芸体験（予約制）も行います。

この機会に、鞍高祭に出かけて見てはいかがでしょうか。

鞍高祭は、六月三日（土）、四日（日）の二日間です。

次頁に写真

※陶芸体験は、六月三日（土）十二時三十分からの予定です。

員に心のこもった手紙をいただき、会食が始まります。食事中も茶碗を作った時に思ったことや、それを手にする時の期待と不安（子どもたちはまだ自分の茶碗を手にしていません）、中学校生活への希望など顔を輝かせて話してくれました。みんな私たちへのおもてなしの心でいっぱいだったのです。

学習支援や読み聞かせとは違い、たった一度だけの陶芸体験での出会いではありましたが、こんなに楽しい時間が持てたことは私にとっても貴重な経験でした。

それは、「一期一会」という言葉をかみしめた時間でもありました。

永井みどり

なんでも掲示板

●「ありがとう給食」に参加して

〈平成二十九年二月十七日（金）〉
場所：下境小学校

二月十七日、下境小学校の給食会に招待されました。これは今年度、小学校にいろいろな形でかかわった人たちに感謝の気持ちを伝えるための行事だそうです。

私たちは交流のあった六年生の教室に招待されました。卒業を間近に控えた教室は子どもたちの笑顔であふれていました。私たち全

●鞍手幼稚園でお茶会

〈平成二十九年二月二十一日（火）〉
場所：鞍手幼稚園

九州女子大附属鞍手幼稚園で、お茶会が開催されました。

お茶会は、毛氈がしかれ、厳かな雰囲気の中での活動でした。卒園間近の子どもたちは、ほどよい緊張感を持ちながら、お茶をたてるところでは真剣にやり方を聞いたり、自分の順番が来るまで、隣の友だちの様子を見つめたりしていました。

初めての抹茶の味は、自分で作ったお茶器ということがおいしさを何倍にもさせたようで、多くの子どもたちが「おいしい」と笑顔で飲み干していました。また、抹茶を飲んで舌が緑色になっている様子をお互いに見せ合って楽しむ姿も見られました。

地域の伝統に触れながら日本の文化に対する興味も高まった素敵な活動でした。

近藤祐輔

●金剛山もととり協議会だより
あじさい祭り

〈平成二十九年六月十日（土）～七月二日（日）〉
場所：金剛山もととり広場

山の木々が芽ぶきの色に変わり「山笑う」季節になりました。

里山も直方の自然公園化へと又一歩前に進んでいくことになりそうです。

里山の玄関口のあじさいも年毎増え三千本余りになりました。

六月十日（土）～七月二日（日）まで、あじさい園を開放します。

本年も昨年同様多くの皆様に綺麗なあじさいを見て頂くことになります。

末松登志子

実行委員会は、高取焼や直方の歴史・文化をアピールしようと大茶会を開催しました。

古高取を伝える会も、古町もち吉ビルにて陶芸体験等で参加致しました。

●平成二十九年定期総会

〈平成二十九年五月二十七日（土）〉
時間：十三時～十五時
場所：直方市中央公民館
記念講演：宮原隆窯 宮原隆次氏
「陶工として生きる」

平成二十九年度の定期総会を右記のとおり開催致します。

記念講演は、会報二十四号の窯元紹介にて紹介させていただいた宮原隆窯の宮原隆次氏です。「陶工として生きる」の演題でお話いただきます。

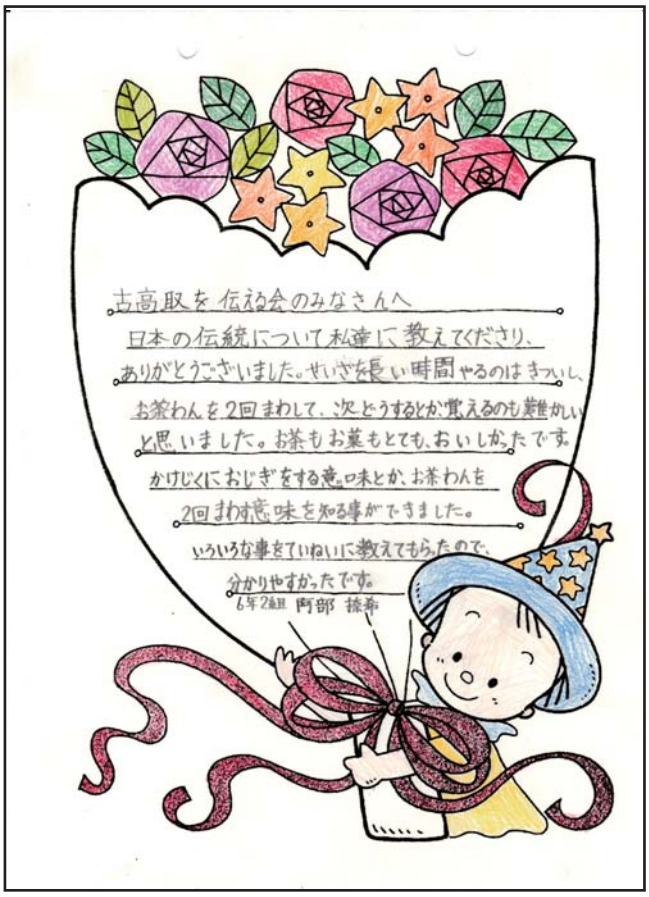
皆様、ご出席くださいますよう宜しくお願い致します。

●高取焼大茶会

〈平成二十九年四月三十日（日）〉
時間：十時～十五時
場所：直方市古町商店街・明治町商店街

ちくぜんのおがた高取焼大茶会

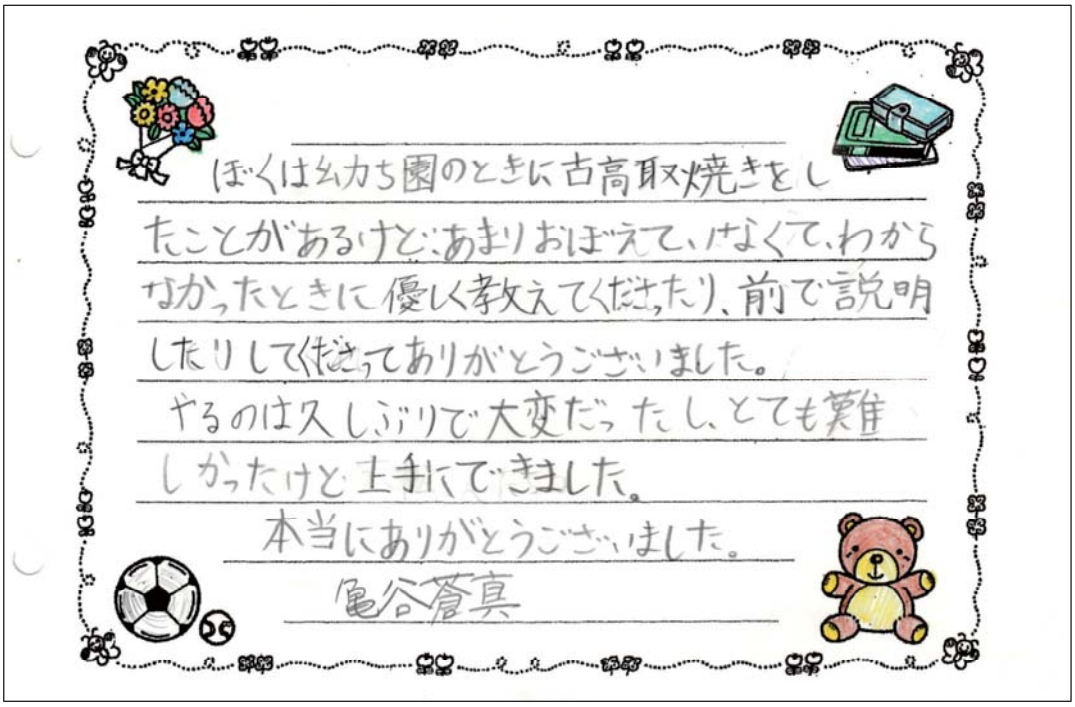
感田小学校の六年生から子供焼物教室の感想文をいただきましたので、以下、少しだけ紹介させていただきます。
※四月現在は中学一年生です。



感田小学校六年二組　　阿部 捺希

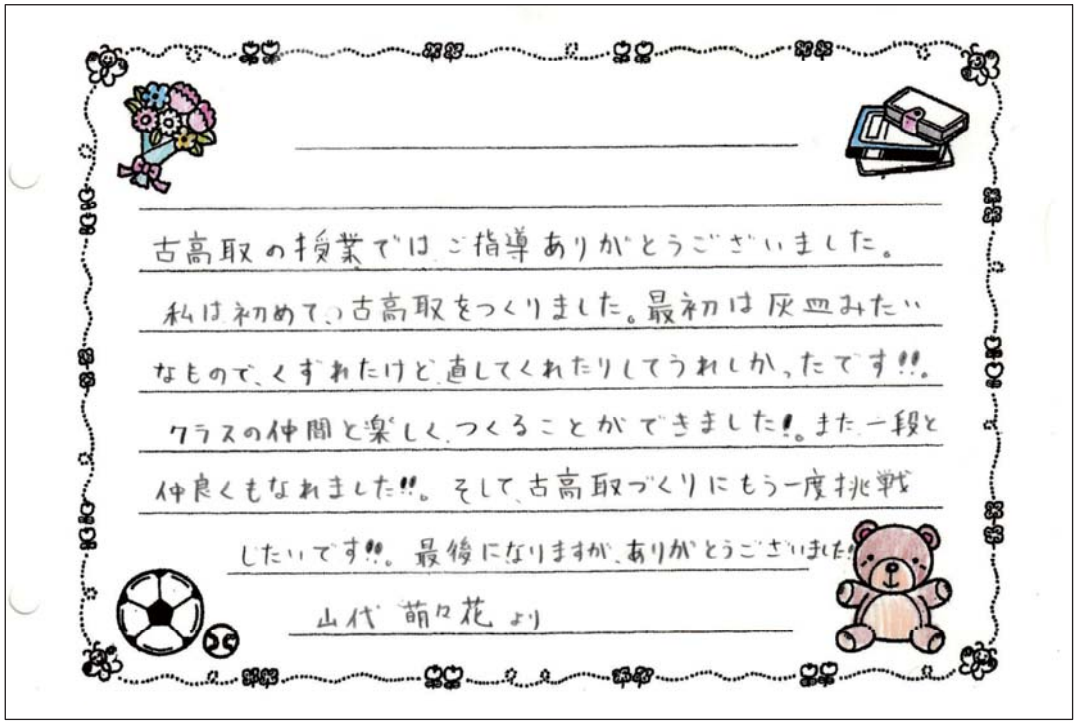
感田小学校六年一組　　弓削田 紗弥圭

下境小学校の六年生から子供焼物教室の感想文をいただきましたので、以下、少しだけ紹介させていただきます。
※四月現在は、中学一年生です。



ぼくは幼ち園のときに古高取焼きをしたことがあるけど、あまりおぼえて、なくて、わからなかったときに優しく教えてくださったり、前で説明したりしてくださってありがとうございました。
やるのは久しぶりで大変だったし、とても難しかったけど上手にできました。
本当にありがとうございました。
亀谷蒼真

下境小学校六年一組　亀谷蒼真



古高取の授業ではご指導ありがとうございました。
私は初めて、古高取をつくりました。最初は灰皿みたいなもので、くずれたけど直してくれたりしてうれしかったです!!。
クラスの仲間と楽しくつくることができました!。また一段と仲良くもなれました!!。そして古高取づくりにもう一度挑戦したいです!!。最後になりますが、ありがとうございました!
山代萌々花より

下境小学校六年一組　山代萌々花

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

市街地では桜の花も散り、梅雨の季節も、もうすぐです。今年の雨量はどうでしょうかね。雨量は、多くても少なくても困ります。自然が相手なので難しいかも知れませんが、丁度良いのが望ましいですね。

古高取を伝える会の活動も、無理をしないで着実に継続して行けるくらいが丁度良いのではと、個人的には思います。

来月は、定期総会が開催されます。皆様、ご出席ください。

「古高取通信」会報・NO25
〈発行〉古高取を伝える会
〈発行日〉平成二十九年四月三十日
〈現在の会員数〉正会員　五十四名（五十四日）
賛助会員　十九名（二十四日）
団体　二団体（二日）
〈マイ茶碗の数〉六千七百八十三個
〈事務局〉〒八二二-〇〇二六
福岡県直方市津田町七-十四
TEL〇九四九(二三)一三二一